

## 数知れぬ追憶から

中田乙一

私が「大平正芳」という名前を初めて耳にしたのは昭和十三年のことでありました。当時、私は大蔵省為替局外資課所屬の大蔵屬という平役人で、上役に大蔵事務官小林英二氏がおられました。小林さんは人間味豊かな方で、エリートコースから外れた私の立場に同情されたのが、寄席に連れていってくれたり、縄暖簾でご馳走してくれたりして、私を励まし慰めてくれたのです。大平さんはその小林さんとは同期の間柄であつたのです。

ある時小林さんに酒のご馳走になりながら、大蔵省のお偉い方々の人物批評に花が咲きまして、小林さんは、こんど飲む時はぜひ大平正芳という男を呼んで三人で一杯やろうよ、とおっしゃられた。小林さんがいうには、自分の同期にはいろいろ愉快な仲間がいるが、大平君を是非君に紹介したい、この人物は一口にいつて将来必ず大物になると思つているのだが、ちょっと毛色の変つた男でとにかく大変な大物なんだ、ということでした。私は、昭和十四年に大蔵省を辞して今の三菱地所に転進してしまいましたので、酒席を共にする機会を逸してしまいました。その時以来「大平正芳」という名前が深く脳裏に刻み込まれてきたのです。未だ見ぬ恋人の大平さんに初めてお会いしたのは、大平さんが確か池田大蔵大臣の秘書官になられた頃であつたと思います。

これに関連して思い出されるのは、池田勇人総理との出会いであります。昭和十四年私が三菱地所入社後の時期に、大蔵省部内北海道勤務経験者の懇親会が日本橋の料亭で催されました。池田さんは当時国税課長でしたが、以前函館税務署長を勤められたということで、この会に出席されたのです。この席で私は皆が帰ってしまった後

まで池田課長と大いに談論を交し、これを契機に私は池田さんの崇拜者になったのでありました。

池田さんが政治に出られ、大を成すにつれて、いわばその一番弟子の大平さんも政治に出られ、池田さん・大平さん、お二人並べて格別の親近感を抱くようになったのも、こつこつ永く深い因縁があったからであります。

池田総理亡き後、代つて大平さんが宏池会代表となられた時点で、やがては総理大臣として登場されることは誰しも予期したところでありますが、それとは別に、大平さんには是非総理大臣をやっていたきたい、と私への願望を抱くようになった一つの場面を記してみたいと思います。

多分、佐藤政権末期の頃、四、五人で大平さんと夕食を共にした時のことですが、大平さんは珍しく能弁に、種々の思ひ出話をされたのであります。話は池田内閣実現の時の裏話でありましたが、池田側近の一人としての大平さんの立ち働きぶりを熱っぽく語られたのであります。その内容を紹介する余裕はありませんが、要するに池田総理の堂々たる政治家姿勢と、大平さんの綿密周到しかも戦略、機略誠に縦横に發揮されたさまが、口下手どころか整然と語られたのにはほとほと感心したのであります。こつこつ純粹さと国を思う心に加え、いわば政治力を身につけられている方ならば、必然的に総理の座につくであらうし、これからの難しい政治経済情勢に対処し得る人は、大平さん以外にないという確信をもったのであります。

大平さんに対する追憶は数知れずのことがありますが、大平さんは人のいうことを何時もニコニコと、そしておざなりではなく周到に耳をそばだてて聞かれました。誠心誠意、人の意見をきく本当に民主的な政治家として、最高の方であると思います。最高権力者は、大平総理の如き知性豊かな美しい人柄でなければなりません。池田総理といい、大平総理といい、日本の国のため文字通り身命を賭して挺身された大政治家であると思います。格別のご交誼を賜った者と致しまして、ただただ感謝し、敬慕するものであります。

(三菱地所会長)